

学との関連の立場から形態学・分類学・古生物学など広い分野の研究をされた。京大講師ののちニューギニアへ仕事に行かれ、戦後、大阪市立大教授となられ、定年退官後は武庫川女子大教授であられた。

昭和49年ご逝去。博士は後世に残る数々の業績をあげられた。

初期のお仕事は、水草の分布・分類・形態・生態に関するものである。多数の学術論文（英文）を発表され、その総括ともいえるのは「山城水草誌 昭和12年 京都府史蹟名勝天然記念物調査報告第17冊」であろう。この刊行物は一地方の調査報告の形であるが、内容は戦前の日本全国の水草をすべて調査された“日本産水草植物学”とでも申すべき高度な学術的著作です。

これによって日本の水草“学”は確立され、水草研究に志す者の唯一の原典であると思います。すべてご自身で採集し栽培（京大植物園内に広く工夫をこらした水系環境を作られた）され、解剖学（茎葉の）・発生学（発芽様式など）・生態学（生育水系の様子）などを克明に記述され、すすんで水草の進化・分類体系の論考に及び、全く他に類をみない労作であります。それまでの諸外国の水草の本にも例のないことです。

この「山城水草誌」は特殊な刊行物なので入手困難でありましたが、戦後大阪市大の有志が復刻本を作られました；残念ながら、それも既に残部がなくなりました。

博士はつづいて水草の調査をされましたが、主力は古生物学（化石や遺体植物）に向けられたようです。水草の化石・遺体の論文も多数ありますが、むしろ一般には“生きている化石”といわれるメタセコイヤ（裸子針葉樹）の三木として有名でしょう。

私はあるとき、三木博士に「先生の水草ご研究の動機はなんでございますか」とお尋ねしました；お応えに曰く「いろいろ有るが、生れ育った香川県の田舎には溜池・池沼・小川が沢山ありまして、水に親しんでいたことが大きな影響でしょう。」と。

日本の水草研究の開拓者、世界的な水草学者であられた三木茂博士の名は、この会の導きの星として永遠に輝くものであります。 合掌

後 書 き

昨夏の第1回集会以後なんの活動もせず今日に及び、会員の皆さまに多大なご不審とご迷惑おかけ申しました。

私をめぐる公私の事情、遠い札幌の地などのことを考えずに、怠け者の私が会長となったのがそもその間違いでした；うかつのいたり。この春からは沖縄へ移りましたので、さらに困難な事態となりました。

今回の集会を機会に、会長を辞めさせていただきます。“無責任な逃げ出し”の形で、心苦しいのですが。

この会第1号は、時日の不足のため、私ひとりで勝手な記事を作ってしまった。今後はバランスのとれた“開かれた”会報となるものと期しております。（8月1日 原 田）